

重圧はねのけ適時打

第96回 センバツ 高校野球

25日の選抜高校野球大会（センバツ）2回戦で、昨秋の明治神宮大会王者の星稜に2-3で競り負けた八戸学院光星。4番の山本優大右翼手（3年）＝大阪府出身＝は、センバツで一番対戦したい相手だった星稜の主戦佐宗翼（同）から三回、試合を振り出しに戻す2点適時打を放つ活躍を見せた。4番打者としての重圧に押しつぶされそうな日々を過ごした山本は「負けてしまったが、昨秋のナンバーワン投手から打ってて自信がついた。夏の甲子園でもう一度対戦したい」と力を込めた。（棟方好華）【詳報17面】

◇ 新チーム始動後、仲井宗基監督(53)から「打順が変わることはない」と4番打者を任され「やってやるぞ」と火が付いた。昨秋の公式戦ではチームトップの11打点を挙げ、打率も3割2分1厘と決して低くはなかったが、「打の光星」と言われているチームの

光星・4番山本「夏もう一度対戦を」



【八学光星＝星稜】3回表、八学光星2死満塁、山本が中前に2点適時打を放ち2-2の同点とする＝甲子園

4番にしては結果が出せていないと思った。だんだんプレッシャーしか感じなくなってきた。

「どのような気持ちで打席に立ったらいいか分からないようにフルスイングしてこ

い」。先輩からもらったその一言で、吹っ切れた。25日の星稜戦では、2点を追う三回、2死満塁の好機で打席に立った。1ストライクからの2球目、内角に甘く入った狙い球の直球をほじぎ返し、中前へ。2人目の走者が本塁へ滑り込んだのを見届けると、一塁上で力強くガッツポーズして喜んだ。

スタンドから息子を見つめた父耕一さん(47)は「いいところを見せられたのではないかな。これからも応援してくれる皆さんへの感謝の気持ちを持ってプレーしてほしい」と笑顔で語った。

聖地を夢見て、大阪府内の強豪校ではなく「甲子園出場が一番近いと思った」八学光星に進学。昨秋の県大会でスタメン入りしてからは「『打の光星』のはずなのに、投手が注目されて悔しい。自分が打撃で引張っていい」と練習のほか、食事やウエートトレーニングにも力を入れ、体も心も一回り大きくなった。

試合後「秋の東北大会（決勝）での無安打無得点試合に比べると、冬場の練習の成果を出せたと思う」と山本。投手を助けられるような打撃をして「打の光星」を証明したい。夏にまた戻ってやることを誓い、甲子園球場を去った。